文芸部第3回リレー小説　一番手：数野千

師走に入って林檎を買った。

その日最後の講義の帰りにスーパーに寄ってもやしと鶏肉と卵をかごに入れた。今日の晩ご飯はうどんの予定で、たまにはトッピングを豪華にしてみようと思ったからだ。普段は素うどんで済ます身からすれば十分ご馳走だ。牛乳もかごに入れて、レジに向かう前にふと思った。最後に果物を食べたのはいつだったろう、思い出せない。

師走である。蜜柑を買おうと思った。冬と言えばこたつ、こたつと言えば蜜柑、蜜柑と言えば冬。そうして向かった先でおばちゃんたちが群がって蜜柑の詰まった袋を取り上げてはもみもみと中身を揉んで蜜柑の弾力を確かめている様子を見て、厚い皮に包まれて見えない果実が無慈悲に蹂躙されている、哀れなことだ、と考えた。そして代わりに林檎を買った。林檎と言えば冬ではないのか、売場の前は空いていたからだ。まだ皮が青いものを選んだ。

無人レジ（と言いながら出口では店員が不審な客がいないか見張っている、監視社会である）の行列に並び、順番が来たら、もやし、鶏肉、卵、牛乳の順番でピッピッと商品のバーコードを読み込んでいく。林檎はバーコードつきではないので、画面に浮かぶ林檎の画像をクリックして個数を選択した。ピッ。音が鳴るのを聞き届けて精算のボタンを押す。示された合計金額の数字に従い支払いレシートを取る。エコバッグに品物を入れて肩に引っ提げスーパーの外へ出た。地面を見つめてため息をつく。

雪が積もっていた。今年、つくば市は未曾有の豪雪に見舞われ、全ての市民から自転車という交通手段が奪われた。コートのフードをかぶり直し、自分のアパートまでの距離を概算して、ワープ技術の十五分以内の実用化を願った。それか雪が止んでくれることを願った。祈りは天に届かないことはもちろんよく知っている。いつになったらこの雪は止んでくれるだろう。三月の卒業式でさえ雪の降る中行われる地元のことを思い出した。

長靴を買わなければ、とざくざく雪を踏みしめながら思った。防雪とは言わない、せめて防水の靴を。しかし叶うならば防雪の靴を。じわじわと水を吸ってじっとりと重くなり冷たくなる靴の中身でかじかむ足を叱咤激励しながら前に進んだ。そうしてアパートの自分の部屋に辿り着き、林檎を冷凍庫に入れた。鍋に水を入れ、鶏肉を茹でもやしを茹でめんつゆを加えてうどんを茹で、器に移して卵をかけて麺をすすった。美味しかった。

林檎は忘れた。次の日の朝食は抜かして昼は食堂で豚丼を食べ、本学での用事を済ませるついでに夕食代わりのパンを買って食べた。けれど夜には小腹が空いて余っていたもやしを炒めてこれでもかと塩胡椒七味一味焼き肉のたれをかけて食べた。美味しかった。

冷凍庫が開かれることはなかった。肉も魚もしばらく買わなかった。アイスを買うこともなかった。冷凍庫の扉に手をかけることはなく、その中にしまわれたいつかの林檎はそこにありつづけた。彼女が見つけるまで。

「ねえこれ林檎？」

苗坂星果（なえさかせいか）が冷凍庫の扉を開いてその所有者であるだろうこの部屋の居住者、冬野稔（ふゆのみのり）に尋ねたのは師走も終わりかけのことだった。いろいろなことがあった。部屋の鍵をなくした。学生証をなくした。二つとも学生支援室に届けられた。そして三日前まで、冬野は流行性感冒にかかっていた。生死の境はさ迷わなかったが単位を失いかけ、それでも生きていた。「治った」とツイートをしたら、「じゃあもう部屋行ってもいい？」とリプライが飛んできた。出会い厨ではない。友人の温かい思いやりだった。

「いいよ」

「なにか食べたいものある？　買ってくよ」

「りんご」

「了解」

二人の共通のフォロワーでありリアルの友人である玉林野ばら（たまばやしのばら）が一連の呟きをお気に入りに登録した。何が彼女の琴線に触れたのだろうと疑問に思いながらも、携帯に続々と届く通知メールに、冬野は何とはなしに人とつながりを持っているような気分がした。

そして苗坂が冬野の部屋にやってきた。林檎買ってきたけどどうする、と居間にいた冬野に玄関のあたりから苗坂が聞く声が届いたので、とりあえず冷凍庫にでも入れといて、と冬野は返した。苗坂は居間への途中にある冷凍庫の扉を開けて、くだんの林檎を見つけたようだった。そして彼女は冬野に尋ねた。ねえこれ林檎？　そこで冬野は年を越す前に林檎を買って冷凍庫に入れたことを思い出した。

「うん。確か今月に入ったばかりの頃に買ったまま忘れてた」

「おい」

「ごめん」

「どうするの」

「どうしよう」

食べれるかな、と冬野が聞くと苗坂は食べれると思うよ、と肯定した。大丈夫なんじゃない、冷凍庫に入れてたんでしょ、凍らせれば時は止まるよ、きっと。苗坂の意見に、冬野は首をひねる。

「そう？」

「まあ切ってみて中身がやばそうだったら食べなきゃいい」

「それもそうだ」

「じゃあ私の買ってきたのも入れちゃっていい？」

「いいよ、お願い」

「はあい」

そんな会話をして、苗坂は冬野の冷凍庫に自分の林檎を入れて居間にやってきた。休んでいた間の講義のプリントやノートのコピーをもらい、連絡を聞き、話をして、ゲームをやり、時間が過ぎた。

「私そろそろ帰らなきゃ」

「引き留めちゃってごめん」

「いや私が来たくて来たんだし」

「ありがとう。助かった」

明日からはまた一緒だね、という台詞で名残を惜しみ合う会話を打ち切り、冬野は玄関で苗坂を見送った。

「そういえば」

吹き込んだ雪が溜まっていて滑りやすいアパートの通路に出ておっかなびっくり足を踏み出し、階段を使って下に降りるため角を曲がろうとして姿が見えなくなりかかっている苗坂が言った。

「林檎買いすぎじゃない？」

冬野は何と言えば分からず、手を振って扉を閉めた。鍵をかけて冷凍庫の扉に手をかけた。開くと、ごろごろごろごろと林檎がたくさん転がり落ちてきた。冷凍庫の中にみっちりと押し込められていたのだった。ごろごろごろごろごろごろごろごろ。溢れるように林檎がこぼれる。ようにではない、と冬野は悟った。溢れていた。明らかに冷凍庫の容量を超えて林檎は排出されつづけていた。薄青い霜をまとった赤、黄、緑の林檎たち。どうやって苗坂はこんな状況の冷凍庫に更に自分の林檎を詰め込んだのだろう？　冷凍庫の扉を閉めようとからだを使って押し込んでも勢いを止めずにほとばしりつづける林檎の洪水に冬野は現実逃避の思考を行った。足下が林檎に埋まる。まるいくせに石のように硬く凍ってつるつる滑るそれらに足を取られて転んだ。まずい、と思って起きあがろうとするがどんどんからだの上に林檎が積み重なっていく。冷たい。重い。身動きができない。

死ぬかもしれない。そう思ったそのとき、玄関から声が聞こえた。

「稔さん、元気？」

午屋辰巳（うまやたつみ）の声だった。